

独白

— ひとりごと —

言語活動を考える

文部科学事務次官
前川喜平

NHK高校講座に「ロンリのちから」という番組がある。論理的な思考の基本となる言語スキルをドラマ仕立てでわかりやすく教えてくれる番組だ。とても面白い。

学校教育の各教科の中でも、学習言語を学ぶという意味で最も基本的な教科は国語である。現行学習指導要領は言語活動を重視し、国語では「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」を通じて、記録、要約、説明、論述といった言語活動を求め、他の教科でもそれぞれの特質に応じた言語活動を求めている。

「言語とは何か」を論ずるのは哲学の領域に踏み込むことであり、浅学の私の及ぶところではないが、学校教育での言語活動については、この場を借りて私なりに少し考えてみたいと思う。

まず、言語には経験の裏付けがなければならない。「夕焼け」という言葉の意味は、茜色の空や金色に光る雲など、実際の夕焼けを経験しなければわからない。言葉の究極の定義は経験である。経験に裏付けられない言葉は空疎な記号でしかない。意味ある言語活動が成り立つためには、豊かな経験が伴わなければならない。

次に、言語は「論理的な言語」と「非論理的な言語」、「実証的な言語」と「非実証的な言語」に区別できる。「ロンリのちから」が教えてくれるのは「論理的で実証的な言語」だ。科学やビジネスの世界で用いられる言語である。他方、文学や芸術の世界の言語は論理的である必要も実証的である必要もない。

「論理的だが非実証的な言語」もある。カルトがよく使う言語だ。「あなたが不幸なのは悪霊のせいだ。だから、悪霊を除けばあなたは幸福になる。あなたが全財産を投げ出せば悪霊は除かれる。だから、あなたは全財産を投げ出せば幸福になる」。三段論法として

は正しいが事実ではない。この類いの言語に騙されないためには、事実と事実でないことを区別する実証的な言語能力が必要だ。

論理的で実証的な言語能力は思考・判断・表現（＝伝達）の手段となり、思考力・判断力・表現力は課題解決の手段となる。だから、言語能力と課題解決能力は手段と目的の関係にあるといえる。では、手段は目的よりも先に獲得されなければならないのだろうか。

解決したい切実な課題があるとき、人は自ら真剣に考え、判断し、その結果を他者に伝えようとする。どうしても解きたい謎がある。突き止めたい真実がある。叶えたい願いがある。守りたい大切なものがある。幸せにしたいたい大切な人がいる。そういう内発的な動機を持って問題を解決しようとするとき、思考力・判断力・表現力は最大限に発揮される。しっかりと考え、判断し、他者に伝えるためには、一貫して論理的で実証的な言語を使わなければならない。

そういう真剣な言語活動の中でこそ、「ロンリのちから」すなわち論理的・実証的な言語能力は最もよく鍛えられるのだろう。